



## ○文・理Ⅱ (の話題かな)

「君たちはどう生きるか」(原作:吉野源三郎、漫画:羽賀翔一)を読みました。感想を一言で表現するならば、「この歳でも感動できました。」ということになります。

この「感動」を詳しく表現・説明しようとするとう観点がたくさんあって長くなるとともに、私にはうまく文章表現しきれないと思います。そこで、受けた感動とはちょっと違う視点で感じた(思った)ことを紹介してみたいと思います。

原作は80年も前のものですので日本の社会状況は現在とはかなり違います。しかし私が主人公とほぼ同じ年だったのはいつのことかと計算してみるともう50年近くになります。そのためか、本の中で設定・表現されている中学校生活の雰囲気は大変身近に感じました。第二次世界大戦を境に日本のいろいろなことが劇的に変化したことだろうと想像しますが、戦前の原作の時代と戦後である自分の中学生時代の状況に多くの出来事が重なりました。特に、前にも記述しましたが下級生から見た上級生の怖さは実感として分かりますね。

次に、「たより 85号」で文系・理系のことを記述しましたが、ここでもその視点で考えてみました。主人公はどちらかというとう理系の中学生のようです。しかし、登場する「おじさん」とのやり取りでは文系の内容も自然につながっていました。「85号」の質問への回答も一つもらえた感触です。映画「ドリーム」からもらった回答とはまた一味違うものがありました。

また違う観点です。この本は基本的に漫画で表現されています。文章のページもありますが、視覚に訴える表現は分かりやすいですね。読み進めることに苦労はありませんでした。現代は文学作品が漫画化されたり、映画(ドラマ)化されたりすることが多くあります。物語などに対して、いろいろな世代に興味をもってもらい、広く普及させることには非常に有効な手段だと思えます。しかし、文章のみの読書も大切です。映像(視覚情報)が少ないおかげで、逆に読者がそれぞれに情景を想像することができます。具体的な画像よりももっと深い世界が読者の頭の中に広がっていきます。かつて小・中学生が描いた読書鑑賞画の審査をすることがありましたが、よい感想画は挿絵の少ない本をもとにしたものの方が多かったことを思い出します。

このKOCHOだよりを読んでおられる方は、書いてあることが抽象的で具体的に理解できない、書いてある内容がころころ変わって一貫していないと思っらっしゃると思います。読みにくかったことと想像します。すみません。しかし、ぜひこの本を実際に読んでみてご自分の感想をおもちになることをお勧めいたします。(販売宣伝をしているわけではありません、)

## つづやき

文系・理系の話題を少し取り上げました。もうひとつ。保育士をめざす人はどちらかというとう文系の人の方が多そうです。しかし、対象となる子どもがどちらに進んでいくかは分かりません。両方でしょう。中にはすでに特長を表現しているこどもがいるかもしれませぬ。本校は短期大学と連携し、幼稚園教諭免許が取得できます。その造形の教科書に右上の絵と描いた子のことばが紹介されていました。



お月様のおうち(6歳・男)

「大きな山は、お月様のおうちで、その中には二日月、三日月、半月と、だんだん大きくなって満月になるまでのお月様がしまっあって、これが毎晩一つずつ出てきて空にのぼる。それで空のお月様は毎晩少しずつ大きくなっていくんだ。」 この子は物理学者になったそうです。